

【雪の朝】

1月24日の朝、学校周辺はすっかり雪景色になっていました。前夜から降り始めた雪は朝までにはやみましたが、学校周辺は約5センチの積雪、路面は凍結していて気をつけて歩かないと危険な状況でした。通学路の除雪をしていると元気な子どもたちが歩いてきました。先生たちに「ありがとうございます」と言える子どもたちに励まされながらしばらく作業をして小学校に戻ると、校庭には子どもたちの歓声が響きわたっていました。ほとんどの子どもが長靴やスノーブーツをはいて登校してきていました。もちろん雪遊びをするつもりで登校してきたのでしょう。（こういうときは自分から進んで持ち物の準備ができる子どもがいるようです。）久しぶりの雪を身体いっぱい感じている子どもたちの笑顔が印象的な朝でした。その笑顔をもっともっと見ていたかったです。

さて、学校で雪遊びができて大喜びだった子どもたちも、学校に到着するまでは電車やバスなどの交通機関の混乱の中をがんばって登校してきたはずですが。保護者の皆さんも交通事情を心配されたことと思いますが、子どもたちの安全を第一に考えていただき、場合によっては学校に連絡の上家庭学習としていただいてもかまいませんので無理をさせないようにしてください。

2月29日にも同じように雪が降りました。学校では翌日に雪遊びを楽しむ子どもたちの笑顔を再び見ることができました。

【電車の中で】

電車で通勤してきた私の目に入ってきた光景。それは、ときどきいただく児童、生徒の電車内での様子についてのクレームの内容そのままのものでした。一般的に通勤電車内はとても静かです。本や新聞などを読む人、音楽を聴く人、携帯電話などの機器を手に行っている人など様々です。そこに小学生から高校生までの大勢の子どもたちが乗り込みます。小学生によく見られるのは「声が大きいこと」「気をひくものがあるとそちらに移動してしまうこと」などでしょうか。私が乗り込んだ車両は、新百合ヶ丘駅の階段から少し離れたところでしたが、そこには小学生だけでなく中高生の姿もたくさん見られました。携帯電話のような機器を操作したり、おしゃべりに夢中になっていたりする子たち。座って足を大きく前に投げ出したり、大きな荷物を床に置いたりしているのも気になりました。

そのような状況で毎日登下校をする子どもたちは、しだいに何がよくて、何がいけないかの判断の基準が分からなくなってくるのではないかと心配になります。学校や家庭で言われることと実際に自分のまわりで行われていることとの違いに戸惑っている子どもがいるのではないのでしょうか。携帯電話を例にあげると、緊急のとき以外は携帯電話を使ってはいけないと言われているのに、お家の人からは「駅についたら携帯で電話なさい」などと言われている子もいるようです。これだけでも子どもによっては大混乱です。

このような日々の積み重ねの中で、子どもたちは自分の都合のいいように物事を考え、判断するようになっていくのかもしれませんが。こういう状況を作り出すことはできるだけ避けたいものです。

子どもの規範意識の低下を嘆く声も聞かれますが、子どもを取り巻く好ましくない環境を作り上げている大人の責任も忘れないようにしたいです。

【桐光郵便局—2年生】

今年も校内で2年生の郵便屋さんが活躍してくれました。私のところにもたよりが届きました。子どもたちからの温かいメッセージがとても嬉しく、返事もできるだけ早く書くように心がけました。短い文であっても、絵だけでも、そこには子どもたちの心がこもっています。そういうものから私は大きな力をもらいます。ありがとうございます、2年生の皆さん！今年も皆さんのおかげで学校の中で心のこもったおたよりのやりとりができました。この時期は校長室の前にぶらさがっているポストもたくさんのおたよりが届くのを喜んでます。

心のこもった一文は、読み手に伝わります。しかし、最近は手紙を書くことが少なくなってしまいました。自分が今行っている作業は、書くというものでなくまさにキーボードを打ち、それが文字になって目の前に現われてくるというものです。「今自分が書いている（打っている）文字に心はこもっているだろうか」そんなことを考えてしまいます。キーボードを打つだけですから、きれいなことばも、そうでないことばも簡単に画面上に出すことができます。そして、そのときの気分で自分の心の片隅にある気持ちを何のためらいもなく文字にし、手紙として出したり、メールであれば簡単に「送信ボタン」を押したりすると、それは一つのたよりとして相手に届きます。メールなどで文字を入力していて、「わ」と打つだけで「分かりました」、「り」と打つだけで「了解しました」というような優れた辞書機能に助けられることがありますが、画面に出てくる「了解しました」・・・もしかしたら自分は「りょうかい」の「り」程度しか「了解」していないのかもしれないと思うことがあります。子どもたちには一文字一文字に心をこめたメッセージを伝えたいです。